

<論文>

イシュコマン・ワヒー語におけるアラインメント¹ On the Alignment Pattern of Ishkomam Wakhi

吉枝 聡子
Satoko Yoshie

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 北部パキスタンに分布するイシュコマン・ワヒー語(東イラン語・パミール諸語)について、暫定的な格標示パターンを提示し、他のワヒー語下位方言との比較からその特徴について考察を行う。パミール諸語は、一部の言語が示す二重斜格型などの特異な格標示構造が、しばしばアラインメント研究で注目されてきた[Dixon(1994)他]。本稿は、イシュコマン・ワヒー語が、3種類の格変化パターンから成る、時制による分裂をともなう主格・対格型タイプをもつことが明らかにした。これは、同じく北部パキスタンに分布し、3項型(中期イラン語の分裂能格型からの移行によるものか)を示すゴジャール・ワヒー語や、時制分裂のない主格・対格構造(一部で能格型を残す)をとるワハン・ワヒー語とは異なるパターンである。また、これらの下位方言が示す異なった格標示パターンは、構文の移行段階にある、様々なステージを反映するものと考えられる。

Abstract: This paper presents a tentative case-marking pattern of the Ishkoman Wakhi (Pamir languages of East Iranian) spoken in northern Pakistan, and examines its characteristics through comparison with other Wakhi sub-dialects. The unique case-marking systems such as 'double oblique' type of some Pamir languages have often been focused in the alignment studies (Dixon 1994 etc.).

Ishkoman Wakhi shows a tense-split nominative-accusative system with three types of declension: case a) to mark S/A in present sentences, case b) to mark S/A in past and perfect sentences and case c) for P in all tenses (=accusative). This system can be explained to be a distinctive alignment pattern which is not compatible with any other Wakhi sub-dialects, such as Gojali Wakhi with tripartite system and Wakhan Wakhi with nominative-accusative one without splits. These different case-marking patterns observed in sub-dialects may be thought to reflect the various stages in the process of the syntactic transition which Wakhi language has undergone.

キーワード: ワヒー語, イラン語派, パミール諸語, 能格性, アラインメント

Keywords: Wakhi, Iranian Languages, Pamir Languages, Ergativity, Alignment



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

¹ 本稿は、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)『「ペルシア語化」の諸相に関する類型論的研究ーワヒー語とクルド語の事例を中心に』(課題No.19K00546)による言語調査の成果の一部である。

1. はじめに

ワヒー語は、タジク共和国ゴルノ・バダフシャン州、アフガニスタン・ワハン回廊、パキスタン共和国ギルギット・バルティスタン州北部、中国新疆ウイグル自治区に分布する、東イラン語・パミール諸語に属する言語である²。

イラン系言語は、その一部に、古い属格に起源をもつ斜格を用いた能格構文を持つ言語があることが知られている³ [Comrie(1981), Haig(2008) 他]。パミール諸語⁴にも同様に、時制による分裂能格を有し、中期イラン語を継承する格標示構造をもつ言語が存在する。特に、ロシャン語等の一部のパミール諸語に観察される、いわゆる二重斜格構造 [他動詞の主語(A)と目的語(P)の両方を同一の形 (=斜格) で標示する : S, A=P(=OBL)型] (Payne 1980,1989) は、アラインメント研究においても特異なパターンとして、しばしば言及されてきた。[Dixon(1994:202-3)等]

本稿は、4カ国にまたがる分布域をもつワヒー語の、主にパキスタン北部で用いられる下位方言のアラインメントを扱うものである。北部パキスタン、すなわちパキスタン共和国ギルギット・バルティスタン州には、複数の地域にワヒー集落が分散して存在する。大きくまとめると、ゴジャール (上部フンザ) 地域からその北のアヴガルチ地域一帯、ゴジャール地域の北東端に位置するシムシャール地域、アフガニスタン・ワハン回廊へと繋がる国境周辺地帯のチャプルサン地域、ゴジャール地方から南西側に離れ、州都ギルギットの西方に位置するイシュコマン地域である。これに加えて、イシュコマン地域よりさらに西のヤスィーン谷、アフガニスタン国境地帯のブロギル村周辺にも小規模のワヒー集落が存在する。パキスタン側のワヒー語人口は 11,700 人とされる (Bashir2009)。

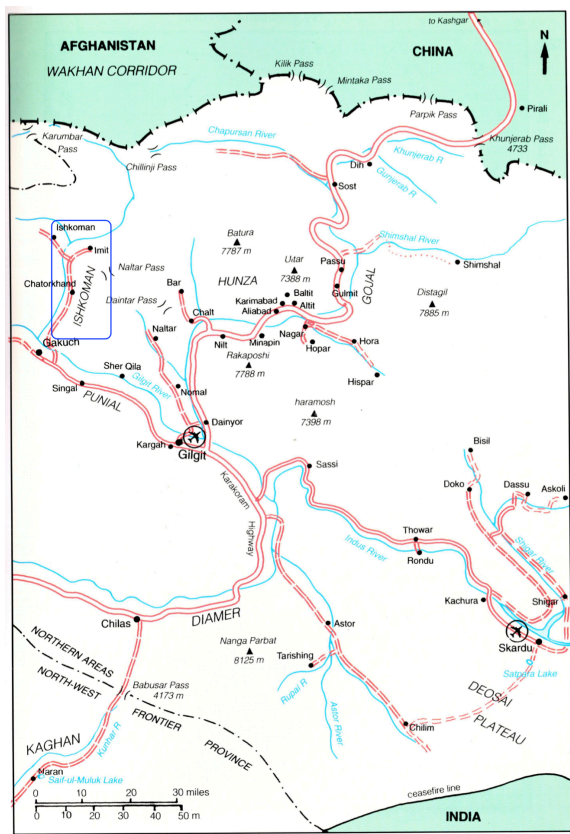
ゴジャール・ワヒー語は、北部パキスタンのワヒー語群では最大勢力を占め、最も言語人口の多いワヒー語方言である。この言語は、現在時制で主格・対格構文、過去時制で能格構文をもつ、いわゆる分裂能格をもつ。またこの言語は、一般的な能格構文で見られる S=P, A パターン [自動詞主語(S)と他動詞目的語(P)が同一の絶対格、他動詞主語(A)が別の格 (=能格) でマークされる-] でなく、自動詞主語、他動詞主語、他動詞目的語 がそれぞれ異なる格で標示される、3項型とみられるパターンを示す。この

² ワヒー語は無文字言語であり、その歴史はワヒー語話者の間では口頭伝承しか残っていないが、Morgenstierne(1938), Lorimer(1958), Backstrom(1992), なにより Kreutzmann(2015)では、当時の英領インドとロシア側の資料から、ワハン藩主国の状況と故地からの移動の経緯が詳しく述べられている。ワハン藩主国は、1880年代までは、現在のアフガニスタン・タジキスタン国境であるパンジ河流域から、その上流のパミール河およびワハン河一帯に広がり、夏営地等を求めて自由に移動し、ゆるやかな移住を繰り返していたと考えられる(Morgenstierne1938)。Mock(1998:17,22)によると、パキスタン側では、250年~400年前には上部フンザ側での最初のワヒー村落が成立していたとされるが、本格的なワハン側からの話者の移住は19世紀後半と考えられている。その後ワヒー語の分布域は、中央アジアをめぐる英国とロシアの抗争、いわゆる「グレート・ゲーム」と、それに続くデュランドラインの画定(1893年)以後は、ワハン地域はロシア(現在のタジキスタン)、アフガニスタン、英領インド(現在のパキスタン)、そして中国に分断されることとなり、現在に至っている。

³ イラン系言語は、西イラン語ではクルド語(クルマンジー方言、上部ソーラーニー方言)、バルーチ語、ダリー語(またはギャブリー語)、ラール語、タート語など、東イラン語ではパミール諸語以外にパシュト語などで、能格構造(または他動詞主語を斜格で標示するタイプ)をもつことが知られている。また、主格・対格構造に移行した言語(ex. マーザンダラーン語等)でも、古い格標示構造の痕跡を示すことがある。

⁴ パミール諸語に属する言語には、大きく Roshani-Shughni (Roshani, Batrangi, Roshori, Shughni, Sariqoli), Yazgulami, Ishkashmi (Ishkashmi, Zebaki, Sanglichi), Wakhi の4グループがあるとされる(Payne 1989)。

3 項型パターンは、能格構文をもつ言語を有するイラン系言語の中でもかなり稀な現象であり、イラン系言語のアラインメントの変遷を扱った Haig(2008:194 他)でも、ワヒー語にはしばしば例外的な位置づけがなされている。またこの3 項型は、アラインメント類型論の点から見ても特異であり、Comrie(1981), Dixon (1994) を初めとするアラインメント研究では、このように一見非効率に見える格標示タイプは、いわば構造上の過渡期段階にあるものと説明されている。吉枝(2009)では、このようなゴジャール・ワヒー語の格標示構造を概観した上で、実際の使用に認められるバリエーションを提示し、ゴジャール・ワヒー語の能格構文に起こりつつあるゆれや、変化の兆しが予測される点について考察した。



【北部パキスタン地図: (Shaw1989:527)を一部改変】

北部パキスタンに分布する下位方言、イシュコマン・ワヒー語は、ゴジャール・ワヒー語に次ぐ、パキスタン側ワヒー語のもう一つの勢力である。ゴジャール・ワヒー語と同じギルギット・バルティスタン州に属するが、州都ギルギットの西方ギゼル郡に位置し、ギルギット川上流のイシュコマン～カランバル谷に分布する(地図内青枠で表示)。

現在のイシュコマン谷には、20 世紀のフンザ藩主国時代のフンザ側からの移住によるとされるブルシャスキー村落と、ワヒー村落が併存している。ワヒー村落は、1880 年代のアフガニスタン側からの移住により開始したとする記録があり⁵、谷の中心村落は Imit である。多様な民族が居住するこの地域では、ワヒー語とブルシャスキー語のほか、パキスタンの国語であるウルドゥー語、加えてコワール語、シナ語、それにイスマイリ派の宗教儀礼言語であるペルシア語も一部通用する。

これまで、ワヒー語の文法組織については、アフガニスタン・タジキスタン側のワハン・ワヒー語に

は Morgenstierne(1938), Grünberg & Steblin-Kaminsky(以下 GSK, 1976,1988), Pakhalina(1975), Payne(1980), ゴジャール・ワヒー語については Lorimer(1957), 吉枝(2005,2009 他), Reinhold (2006)などの研究があり、ワヒー語全般については、主に GSK と Pakhalina, Payne の記述をもとにした Bashir(2009)らによって報告がなされてきた。しかしながらイシュコマン・ワヒー語については、上記 Lorimer(1957)や Kreutzmann(2015)らによる移住の経緯など、イシュコマン・ワヒー村落への言及はあるものの、その文

⁵ フンザ側のワヒー語を広く記述した Lorimer によると、ワハン回廊側からイシュコマン地域への最初の移住者は、1880 年の藩主 Ali Mardan Shah とされる。それによると、Ali Mardan Shah とその家族計 70 世帯が、当時のアフガニスタン国王 (Abdur Rahman Khan) の少数民族に対する圧力から現在のパキスタン側 Yasin へ逃れ、チトラール藩主であった Aman ul-Mulk より、イシュコマン藩主として土地を供与された(Lorimer 1958:8)。Kreutzmann(2015:221-228, 397-401)では、その背景と経緯が詳しく述べられている。イシュコマンのワヒー人口は、1900 年代から 1950 年代にかけては 500~600 人前後、1950 年代では 1000 人前後との記述がある(Kreutzmann2015:306,308)。Backstrom(1992)は 1980 年では約 2000 人と推定している。

法形態についてはほぼ未報告である。またワヒー語の他の下位方言との関係についても明らかになっていない。

筆者は、2022年夏にイシュコマン・ワヒー語における調査を行う機会を得た。ゴジャール・ワヒー村落に出稼ぎに来ていた、イシュコマン・ワヒー語話者（20歳・男性）を対象としたインフォーマント調査であり（現地調査は同年夏のパキスタン洪水で断念）、得られたデータはなお基本レベルである。しかしながら、その中でも、これまで筆者がパキスタン側で主に調査を行ってきたゴジャール・ワヒー語や、ワハン・ワヒー語とは明らかに異なる格標示構造が観察された。本稿はその中間報告ではあるものの、イシュコマン・ワヒー語について暫定的なアラインメントパターンに関するデータを提供してその特徴を報告し、他のワヒー語下位方言との比較から同言語を位置づけ、この言語に生じている格標示構造の変遷とその現状について、考察を行うものである。

まず、これまで報告例がある先行研究を中心に、ワハン・ワヒー語およびゴジャール・ワヒー語の格標示体系をまとめ、それと比較する形で、今回得られたイシュコマン・ワヒー語の格標示の特徴について述べていくことにする。

2. ワハン・ワヒー語およびゴジャール・ワヒー語における格標示

2.1. ワハン・ワヒー語

ここでは、アフガニスタン・タジキスタンに分布するワハン・ワヒー語（またはタジク・ワヒー語：アフガニスタン・ワハン回廊およびタジキスタン共和国ゴルノ・バダフシャン州）について、主に GSK(1976,1988) と Payne(1980), またこの2点と Pakhalina(1975)のデータを基にした Bashir (2009) の記述をもとに、格標示を概観する。

2.1.1. ワハン・ワヒー語における格標示構造

ワハン・ワヒー語のアラインメントに関連する格としては、以下のように主格と二つの斜格が提示されている。これ以外の格変化としては、属格、与格、奪格の別がある。

表 1.ワハン・ワヒー語の格標示

	主格	斜格 1	斜格 2 ⁶
1 人称単数形	wuz	maž/ma	mažəy
2 人称単数形	tu	taw/ta	tawəy
3 人称単数形 I ⁷	yəm	yəm	yeməy
II	yət	yət	yetəy
III	yow/yaw	yow/yaw	yawəy
1 人称複数形	sak	sak	sakəy
2 人称複数形	sa(y)iš(t)	sav	savəy
3 人称複数形 I	yəmiš(t)	yəməv	yəmənəy
II	yətiš(t)	yətəv	yətənəy
III	ya(w)iš(t)	yav	yavəy

[GSK(1988:26,29),Bashir(2009:830)より]

⁶ GSK(1975)や Bashir(2009)で-əy と記述されている斜格語尾は、Payne(1980)では上部ワハン・ワヒー語では-əy、下部ワハン・ワヒー語では-i とされている。Morgenstierne(1938:487)は、これは古代期の属格語尾-ahyā に由来するものと説明している。

⁷ 人称代名詞 3 人称の I/II/III はそれぞれ、近称、中称、遠称を指す。

GSK(1976,1988) では, 対象とする(下部)ワハン・ワヒー方言が主格・対格構文をとるためか, 斜格 1, 斜格 2 を対格(語尾なし/語尾付き)として説明している。これらの二つの斜格は, 普通名詞の目的語を標示する際は用法上の区別があり, 斜格 1 (=対格 1) は不定事物, 斜格 2 (=対格 2) は定事物を表す。しかし, 代名詞では語尾-əy の付加は任意で, この二つの斜格は実際の用法で大きな違いはないとされる。また, 1 人称複数, 3 人称単数では, 主格と斜格 1 は同形となる。

2.1.1.1. 現在時制⁸

現在時制では主格・対格構造をとり, 動詞活用形は主語に一致する。

- 1) wuz rəçəm 'I am going' (Payne 1980:180)
 I.ABS go.PRS.1SG
- 2) wuz tawi winəm-əş 'I see you' (Payne 1980:180)
 I.ABS you.OBL2 see.PRS.1SG-PROG
- 3) xəc rand marək 'Give me bread' (GSK:562)
 bread.OBL1 give.IMP to me

2.1.1.2. 過去時制

過去時制の構造は, 方言により状況が少し異なる。Payne(1980)では, ワハン・ワヒー語は, 下部ワハン方言(ワハン回廊パンジ河流域に分布, Namadgut 方言など)と, 上部ワハン・ワヒー方言(パンジ河上流のワハン河とパミール河沿いに分布)では, 用法上の違いが見られることを指摘している。

①下部ワハン・ワヒー語

過去時制は現在時制と同様に主格・対格構文をとり, 自動詞・他動詞にかかわらず主語と動作主は絶対格(=主格)にたつ。他動詞の目的語は, 不定の事物は斜格 1 (=対格 1), 定の事物は斜格 2 (語尾付き, =対格 2) で示す。ただし, 他動詞の目的語が代名詞である場合は, 斜格語尾-əy の出入りが任意となるなど, 斜格 1 と 2 で混乱が見られる。

- 4) yawiš (*yav) pə kək rəŷd=əv 'They went to the spring' (Payne 180)
 they.ABS to the spring go.PST.3PL=PRON.ENCL.3PL
- 5) wuz (*maž) tawi wind=əm 'I saw you' (Payne1980:180)
 I.ABS you.OBL2 see.PST.1SG=PRON.ENCL.1SG
- 6) mauzman yawəy pə xingarən dəytəy 'Mauzman struck him with (his) sword' (GSK:581)
 he.OBL2 with sword hit.PST

②上部ワハン・ワヒー語

上部ワハン・ワヒー語については, Payne(1980)は数例の文例を提供するだけだが, 他動詞文では主語が 1, 2 人称単数形でのみ斜格 1, 目的語が斜格 2 をとることが示されている。ただし, 主語の標示に斜格系複数語尾-əv をもつ形は許容されない(この点に対するデータは不掲載)。このように, 上部ワハン方言では, 1・2 人称単数形のみ能格の痕跡である斜格が残り, 他の格では主格・対格構文が併存

⁸ 2.1 ワハン・ワヒー語については, グロス引用元の先行研究の扱いを踏襲する。

している。また他のパミール諸語との比較から特異な点として、自動詞の主語の標示にも斜格が用いることが可能であるとする。

7) maž rəʔd(-əy) 'I left' (Payne1980:180-1)
I.OBL1 go.PST

8) maž tawəy wind(əy) 'I saw you' (Payne 1980:180)
I.OBL1 you.OBL2 see.PST

2.2. ゴジャール・ワヒー語⁹

ここでは、主に吉枝(2009 他)を中心に、ゴジャール・ワヒー語の格標示構造について述べる。

2.2.1. ゴジャール・ワヒー語における格標示構造¹⁰¹¹

ゴジャール・ワヒー語は、現在時制で主格・対格構文、過去時制で能格構造をとる、中期イラン語の分裂能格を継承するアラインメント体系をもつ。これに関わる格としては、時制共通で自動詞の主語(S)および現在時制で他動詞の動作主(A)となる主格、現在時制における他動詞の目的語(P)および過去時制で動作主(A)となる斜格 1 (無期尾形)、過去時制で他動詞の目的語(A)となる斜格 2 (語尾付き形)がある。過去時制の格標示構造は S,A,P の 3 項型 (または変形の二重斜格型?) となり、一般的な能格・絶対格構造とは異なる、特徴的なパターンをとる。

以下に、ゴジャール・ワヒー語の名詞・代名詞変化を示す。

表 2. ゴジャール・ワヒー語の格標示

代名詞	主格		斜格 1		斜格 2			
	単数	複数	単数	複数	単数	複数		
1	wuz	sak	maž	sak	maže	sake		
2	tu	sašt	tow	sav	towe	save		
3 ¹²	I	yem	yemišt	yem	yemev~yemv	yeme	yemve	
	II	yet	yetišt	yet	yetev~yetv	yete	yetve	
	III	yow	yašt	yow	yav	yowe	yave	
普通名詞			-išt	不定	-	-ev	-e ~ φ	-eve/-ve
				定	-	-ev	-e	-eve/-ve

上記の格は、以下の項を標示する。

主格：現在時制における自・他動詞の主語 (S および A) ・過去時制における自動詞の主語(S)

斜格 1：過去時制における他動詞の目的語(P)

斜格 2：現在時制における他動詞の目的語(P) ・過去時制における他動詞の主語(A)

⁹ 奇妙なことに、パミール諸語の二重斜格構文について言及している Kaufman(2017)では、ワヒー語ゴジャール方言として紹介しているデータで斜格 2 が出現せず、過去形の目的語を同一の斜格で表す、いわゆる「二重斜格構造」として分析している。ここではデータが限定されているため確認のしようがないが、ゴジャールに分布するワヒー語村落間や世代間によって、斜格 2 の省略を含むバリエーションが存在する可能性があることを付記しておく。

¹⁰ ゴジャール・ワヒー語の音韻体系については Yoshie (2005)を参照。

¹¹ 同言語では、これ以外に属格、与格、奪格の別が確認されている。

¹² 3 人称単数形 I/II/III はワハン・ワヒー語と同様に近称／中称／遠称を示す。

なお, Bashir(2009) 等の記述では, 語尾なし形を斜格 1, 語尾付き形を斜格 2 としている。吉枝(2009) 等では語尾付き形を斜格 1, 語尾なし形を斜格 2 としてきたが, 本稿では, ワヒー語下位方言間の比較を行うため, 語尾なし形を斜格 1, 語尾付き形を斜格 2 として論じることとする。

2.2.1.1. 人称接語

ゴジャール・ワヒー語では, 上にあげた独立形の人称代名詞に加えて, その代用として人称接語が頻繁に用いられる。人称接語は, 古代~中期イラン語の人称代名詞接尾辞形を継承するものと考えられ, 動詞人称語尾とは異なる¹³。人称接語は, ゴジャール・ワヒー語ではコピュラの機能をもつほか, 過去時制における他動詞文中で, 最初の主要要素に付加され, 人稱代名詞の斜格 2 (=動作主) を示す, また人稱代名詞独立形との複合形で過去時制の活用形を形成するなど, 多様な用法をもつ。

	単数	複数
1	-em	-en
2	-et	-ev
3	-i~φ	-ev / -uv

2.2.1.2. 現在時制¹⁴

ゴジャール・ワヒー語は, ワハン・ワヒー語と同様に, 現在時制では他動詞は主格・対格構文をとる。すなわち, 自動詞の主語(S)および他動詞の主語(A)はともに主格, 他動詞の目的語(P)は斜格 2 に立ち, 現在語幹+動詞人称語尾から成る現在形は, 他動詞文では A に一致する。

9) wuḍq wuz-eṣ ra sisuni rečem 「私は今日シスーニーに行く」
 today I.NOM-PROG (down) to Sisuni go.PRS.1SG

10) wuḍq wuz-eṣ reime winem 「私は今日ラヒームに会う」
 today I.NOM-PROG Rahim.OBL2 see.PRS.1SG

11) yow-eṣ¹⁵ draxtve diḫt 「彼は木(複数)を切っている」
 he.NOM-PROG tree.PL.OBL2¹⁶ cut.PRS.3SG

2.2.1.3. 過去時制

2.2.1.3.1. 自動詞

過去時制では, 自動詞文の主語は現在時制と同一の主格を用いる。自動詞の単純過去形は, 主格+人称接語(3人称単数以外)と過去語幹-eの組み合わせから作る。この接辞-eの機能は不明であるが, 自動

¹³ ゴジャール・ワヒー語の動詞人称語尾は, 現在形を形成する際のみ使用する。過去時制・完了形では用いられない。

	単数	複数
1	-em	-en
2	-(φ)	-ev
3	-(i)t / -d	-en

¹⁴ ゴジャール・ワヒー語の動詞体系の詳細については, 吉枝(2008) を参照。

¹⁵ -(e)ṣ は進行(場合によっては未完了)を示す接尾辞。

¹⁶ 不定の事物が目的語になる場合は, 斜格 2 の語尾は省略されることがある。

詞の過去形にのみ現れ、他動詞の過去形では見られない。完了形は、それぞれ主格 (S=NOM)+人称接語 (過去完了 3 人称単数以外) と過去分詞または完了語幹との組み合わせで作る。

12) wuz=em ra sisuni reŷide 「私はシスーニーに行った」
I.NOM=PRON.ENCL1SG. (down) to S go.PST

13) yašt=ev ku tan westu 「彼らは全員来ていた」
they.NOM=PRON.ENCL.3PL all come.PST.PRF

2.2.1.3.2. 他動詞

他動詞の過去時制は、現在時制とは異なり、主語(A)は斜格 2, 目的語(P)は斜格 1 で標示される。活用形は、単純過去形は過去語幹, 完了形は過去分詞または完了語幹で表すのみで、現在時制で用いる動詞人称語尾は付加せず、また自動詞の過去時制・完了形に見られる人称代名詞+人称接語の共起も起こらない。このため、中期ペルシア語等の過去時制に見られる、斜格による動作主の標示に加えて動詞人称語尾が目的語に一致する能格構文¹⁷に比べると、統語主軸が捉えにくい構造となっている。

14) yezi maže reim wind 「私は昨日ラヒームに会った」
yesterday I.OBL2 Rahim.OBL1 see.PST

15) reime maž wind 「ラヒームは私に会った」
Rahim.OBL2 I.OBL1 see.PST

16) yowe-š draxtev dišt 「彼は木を切っていた」
he.OBL2-PROG tree.PL.OBL1 cut.PST

17) žu nane mažer luqpar gošt 「私の母親は私に服を作った」
my mother.OBL2 to me cloth.SG.OBL1 make.PST

18) sake čoy pit 「私たちはお茶を飲んだ」
we.OBL2 tea.SG.OBL1 drink.PST

19) maže xalg wotsn likerck 「私は人間であることをやめた」
I.OBL2 to be human INF.OBL1 give up.PRS.PRF

他動詞主語を表す斜格 2 は省略も可能で、その場合は人称接語が文の主要要素に付加されて A を表す。実際の用法ではこの省略形の方が高頻度に用いられている。

20) čoy=en pit 「私たちはお茶を飲んだ」
tea.OBL1=PRON.ENCL.1PL drink.PST

¹⁷ 中期ペルシア語の能格構文の例：

man tō dīd hē 「私は君を見た」(ただし、2 人称単数形では直格/斜格は同形)
I.OBL you.DIR see.PST.2SG
(Āmuzgār, 山内 1997:63)

なお、ゴジャール・ワヒー語では、実際の使用上のバリエーションとして、斜格2の語尾が脱落する例や、斜格1に本来不要な語尾が付加される場合など、斜格語尾にゆれがある事例もしばしば認められ、格標示構造が不安定になっていることをうかがわせるケースも観察される。この詳細については吉枝(2009)を参照されたい。

3. イシュコマン・ワヒー語

2022年の調査では、イシュコマン・ワヒー語の名詞変化には、3.1.以下に述べるアラインメント関連の3つの格に加えて、属格、与格、奪格の別があることが明らかとなった。また名詞は、他の下位方言と同様に文法性の別はもたず、人称代名詞3人称は単複ともに近称・中称・遠称の3種があることが確認された。

3.1. イシュコマン・ワヒー語における格標示構造

自動詞主語、他動詞主語、他動詞目的語の標示については、代名詞を中心に、3つの格変化パターンが確認された。冒頭に述べたように、今回の調査は限られた数のインフォーマントから得られたデータであるためさらなる確認の必要はあるが、これらを便宜上格1, 2, 3として、変化パターンを以下に示す¹⁸。

表3. イシュコマン・ワヒー語の格標示

	格1			格2		格3	
	単数	複数		単数	複数	単数	複数
1	wuz	sak		maž	saken ¹⁹	maž	sak
2	tu	sayš		taw	sayš~ saš	taw	sav
3 (III ²⁰)	a	ayš		a/aw/ow	ayš	aw	av
普通名詞	-	-iš	不定	-	-iš	-	-ev
	-	-iš	定	-	-iš	-	-ev

イシュコマン・ワヒー語では、ゴジャール・ワヒー語やワハン・ワヒー語に認められる、語尾付き斜格に対応する格変化は確認できなかった。また普通名詞の単数形はすべて語尾なし（またはゼロ語尾）となり、格の別は認められなかった。さらに、ワハン・ワヒー語下部方言のような、目的語の定性による格の使い分けも行われていないことが分かった。

それぞれの格は、以下の標示機能を示すことが明らかとなった。

格1：現在時制における、自動詞の主語(S)と他動詞の主語(A)

¹⁸ イシュコマン・ワヒー語の音素体系はゴジャール・ワヒー語のそれとはやや相違があることは確認しているが、本稿では便宜上、筆者が使用しているゴジャール・ワヒー語に合わせて表記しておく。

¹⁹ saken は、ゴジャール・ワヒー語等を考慮すれば、人称代名詞 sak+人称接語-en の複合形と分析することもできる。ただし、イシュコマン・ワヒー語では、下の文例のように saken は人称代名詞独立形と過去語幹から形成する単純過去形等において、他の人称代名詞の独立形と同様に用いられている。これらのことから、ここでは saken は暫定的に単一の格変化形としておく。

maž / saken (*sak) bimor vit 「私は／私たちは病気になった」

I格2/we格2 ill become.PST

²⁰ 3人称単数形は近称/中称/遠称 am/at/a~aw の別があるが、格変化上は同一の振る舞いをするため、ここでは遠称のみを記しておく。

格2：過去時制における，自動詞の主語(S)と他動詞の主語(A)

格3：現在時制および過去時制における，他動詞の目的語(P)

このように，各々の格が示す標示機能から，イシュコマン・ワヒー語は，いずれの時制でも主格・対格構造をとっており，格3は時制を通じて目的語を示すことから，対格であると分析して差し支えない。しかしながら，上に提示したイシュコマン・ワヒー語のアラインメントは，3項型を示すゴジャール・ワヒー語はもちろん，ワハン・ワヒー語が示す，主格と二つの斜格からなる主格・対格型(表1)のアラインメントとも異なる様相を示している。すなわち，格1と格2はどちらも自・他動詞の主語を表すため主格とみなしてよいが，そこには時制の分裂がみられ，格1は現在時制，格2は過去時制で用いられる点である。これは，同じく主格・対格構文を有するワハン・ワヒー語には見られない点である。

以下，上記の3種類の格の標示機能について詳しく文例を見ていく。各々の格変化パターンは，便宜上「格1/2/3」としてグロス中に示す。なお，格の別がない名詞単数形では，代名詞等の格変化から適当と思われる格パターンでグロスを付すこととする。

3.1.1.1. 現在時制

現在形は，自動詞・他動詞共に現在語幹+動詞人称語尾で形成し，主語に一致する。人称代名詞が主語となる場合には，2人称単数形では格1 tu と格2 taw，3人称単数形で格1 a と格2 aw で混乱が見られることがある。

3.1.1.1.1. 自動詞

21) a broker ra ti xun reš(i)t 「彼女は明日君の家に行く」
she.格1 tomorrow (down)to your house go.3SG.PRS

22) wuz ŷa arom mešen čawem 「私は注意して歩くよ」
I.格1 very carefully walk.1SG.PRS

3.1.1.1.2. 他動詞

23) wuz-eš aw dišem 「私は彼を知っている」
I.格1 -PROG he.格3 know.1SG.PRS

24) ayš wuḍq mür dərzen 「彼らは今日リンゴを買う」
they.格1 today apple.格3 buy.3PL.PRS

25) tu čoy go 「君はお茶を淹れる」
you.SG.格1 tea.格3 make.2SG.PRS

26) reim-eš murad de(y)xt 「ラヒームはムラードを殴っている」
Rahim.格1 -PROG Murad.格3 hit.3SG.PRS

27) kum kaš ts kušten varz tse, aw quw! 「一番背が高い子を呼んで！」
any boy taller than all FOC he.格3 call.IMP

3.1.1.2. 過去時制

イシュコマン・ワヒー語では、自動詞・他動詞に共通して、自・他動詞の主語には格2、他動詞の目的語には格3が用いられ、構文上はS=A, Pの主格・対格パターンをとる。1人称単数形が主語となる文では、格2 *maž* の代わりに格1 *wuz* に人称接語を伴った形 *wuzum* と入れ替わるケースがしばしば認められる。

3.1.1.2.1. 自動詞

過去時制では自動詞の主語は格2で標示される。自動詞の単純過去形および完了形は、単純過去形は動詞の過去語幹-i (ゴジャール・ワヒー語の-eに相当か)、現在完了形は過去分詞、過去完了形は完了語幹より形成する。いずれの活用形でも動詞人称語尾は付かず、ゴジャール・ワヒー語の過去形・完了形に見られるような、人称代名詞主格+人称接語の共起も行われない。ただし1人称単数形では格2の代わりに格1+人称接語(*wuzum*)が用いられることがある。

28) *maž yez wezdi* 「私は昨日やって来た」
 I.格2 yesterday come.PST

または

29) *wuz=um yez wezdi*
 I.格 I=PRON.ENCL.1SG yesterday come.PST

30) *taw gulmit čizer westu?* 「君はなぜグルミットに来たの」
 you.格2 Gulmit why come.PST.PRF

かなり使用頻度は少ないが、人称代名詞の独立形に変わり、人称接語が用いられることもある。この人称接語との交替については、さらにデータ収集を行う必要がある。

31) *wuðq=em tik vitk* 「(私は) 今日元気になった」
 today=PRON.ENCL.1SG fine become.PRS.PRF

3.1.1.2.2. 他動詞

過去時制も他動詞文は主格・対格構文をとるが、他動詞の主語は格2で表す点が現在時制と異なる。目的語は時制に共通して格3で表す。また、他動詞の単純過去形は、ゴジャール・ワヒー語では接尾辞-eを伴わない過去語幹が用いられるが、イシュコマン・ワヒー語では、自動詞過去形にみられる接尾辞-iが、他動詞の過去語幹にも付加されるケースがしばしば認められる。この接辞-iの有無は任意のようである。現在完了形と過去完了形は自動詞と同様、過去分詞と完了語幹より形成される。自動詞の場合と同様、動詞人称語尾の付加はなく、ゴジャール・ワヒー語の完了形のような人称接語との共起も見られない。ただし1人称単数形では自動詞と同様に、格2の代わりに格1+人称接語の組み合わせ(*wuzum*)が用いられることがある。

32) *saken xēč yiti* 「私たちは食事をした」
 we.格2 meal.格3 eat.PST

33) *že sati yez mar kitob rat* 「私の友人は昨日私に本をくれた」
 my friend.格2 yesterday to me book.格3 give.PST

34) *saken ar kitob ratu* 「私たちは彼に本をあげた」
 we.格2 to him book.格3 give.PST.PRF

35) šač maž yiti 「犬が私を咬んだ」
dog.格2 I.格3 bite.PST

36) maž čoy piti 「私は茶を飲んだ」
I.格2 tea.格3 drink.PST

または

37) wuz=um čoy piti
I.格1=PRON.ENCL.1SG tea drink.PST

3.2. イシュコマン・ワヒー語の格標示構造:まとめ

以上のように、今回得られたイシュコマン・ワヒー語の格標示は、ワハン・ワヒー語と同じ主格・対格構文をとることは確認されたものの、ワハン・ワヒー語、ゴジャール・ワヒー語のいずれとも一致しない構造を示すことが明らかとなった。イシュコマン・ワヒー語の格標示構造の特徴は、概ね以下のようになる。

1) 代名詞では、S (自動詞主語)、A (他動詞主語)、P (他動詞目的語) の標示に関係して、3つの格変化パターンが認められる。すなわち、①現在時制のSとA ②過去時制のSとA ③現在時制および過去時制のP、を標示する格である。

2) 1) より、格3は対格機能をもつものと分析でき、イシュコマン・ワヒー語では、ゴジャール・ワヒー語を初めとする一部のイラン系言語で認められる分裂能格ではなく、現在時制・過去時制ともに、S=A,Pの主格・対格構文をとることが明らかである。

3) ゴジャール・ワヒー語やワハン・ワヒー語にみられる、語尾つき斜格(斜格2)に対応する形は確認できなかった。

4) 自・他動詞両方の主語を標示する格1と格2は、時制によって分裂することが確認された。これは、同じく主格・対格構文をもつ下部ワハン・ワヒー語でも見られないパターンであり、イラン系言語でも極めて特異な現象といえる。

5) 普通名詞では、単数形では格1/2/3の別がなく、格3もワハン・ワヒー語の対格のような、定性による使い分けは認められない。複数形は格1・2は同形で、格3のみ異なる変化パターンを示す。

6) 過去時制では、自・他動詞の両方で、1人称単数形で、格2 maž と、本来は現在時制に用いられる wuz+人称接語との複合形(wuzum)と交替する例が認められる。

7) イシュコマン・ワヒー語では、人称接語は、コピュラの用法も含めて使用頻度が甚だ少ないようである。ゴジャール・ワヒー語に頻繁に見られる、人称代名詞の省略と人称接語の交替例もあまり認められず、他動詞文中でも、動詞の項の標示に人称代名詞の独立形を用いる例が優勢である。

なお、格標示に直接には関わることではないが、イシュコマン・ワヒー語では、動詞組織上も、以下のような、他の下位方言との相違点を確認された。

8) 過去時制で能格構文をとるゴジャール・ワヒー語では、自動詞と他動詞では異なる方法で活用形を形成する[過去形—自動詞: S=人称代名詞主格+人称接語/過去語幹+*-e*, 他動詞: A=斜格2, P=斜格1, 過去語幹]。一方で、イシュコマン・ワヒー語では、過去形が自・他動詞で形態上の区別がなくなっており、他動詞でも、本来は自動詞で見られることが予測される接尾辞*-i*を過去語幹に付加するケースが見受けられる。さらに、ゴジャール・ワヒー語の過去時制にみられる、人称代名詞+人称接語の組み合わせの共起も認められない。

3.3. ワヒー語他方言との関わり: 格標示の変遷に対する仮説

上記2.で示したように、主格・対格構文をとるワハン・ワヒー語と、なお分裂能格を保持するゴジャール・ワヒー語の間には、アラインメントの上で大きな隔りがある。この点で、今回確認されたイシュコマン・ワヒー語は、(下部?)ワハン・ワヒー語の特徴をより強く継承していることは明らかであり、これは、Lorimer(1958)等による、1880年代以降のワヒー語話者の現在のイシュコマン側パキスタンへの移住の経緯に関する記述内容とも合致する²¹。

19世紀以前のワヒー語の文法形態についての記録は、いずれの方言についても存在しない。しかしながら、ワハン・ワヒー語地域(特に下部)は、伝統的に、既に中期の能格構造と格の別を喪失したペルシア語文化圏の一部であり、地域の共通語で教養言語でもあったペルシア語の大きな影響下にあった。下部ワハン・ワヒー語がGSK(1976)やMorgenstierne(1938)による報告の時点で主格・対格構造を示していることを考えると、1880年代にワヒー語話者がワハン回廊からイシュコマン地域に移住した当時には、既にかなりの確率で主格・対格構文への移行が進んでいたことが推測できる。またゴジャール・ワヒー語がなお能格構文を保持している理由については、現段階で考察する限り、ワヒー語が能格性をまだ保っていた段階で、移住がイシュコマン側より以前に行われたものか、あるいは、一部に能格性を残していた上部ワハン方言の話し手が移住し、その後何らかの理由(ブルシャスキー語との言語接触の影響等を考慮に入れる必要があるかもしれない)で現在のアラインメントへと変化したか、などの理由が考えられる。いずれにせよ、同じ北部パキスタンに分布してはいるものの、イシュコマン・ワヒー語とゴジャール・ワヒー語とは、かなり異なる経緯を経て、それぞれのアラインメント体系を持つに至ったことが予測できる。

しかしながら、イシュコマン・ワヒー語がワハン・ワヒー語の継承性を強く示す方言であるとしても、現在のイシュコマン・ワヒー語が示す格パターンとワハン・ワヒー語のそれとは、なお隔りがある。すなわち、1)イシュコマン・ワヒー語側では語尾つき斜格に相当する形が存在しない点、2)イシュコマン側の格2にあたるパターン(=主格・対格構文における時制による分裂)がワハン・ワヒー語側では起こらない点、である。また格標示に関わる事象以外にも、イシュコマン側とワハン・ワヒー語では、他の文法形態上で多くの相違点があることを確認している。

では、イシュコマン・ワヒー語のアラインメントは、どのような理由とプロセスによって、一見非効率にも見える、時制による分裂を伴う主格・対格型に至ったかと考えることが可能だろうか。この解明には今後さらに検証を行っていく必要があるが、現在得られているデータの分析から、以下のような仮説を提案しておく。

ワヒー語下位方言の格標示パターンを通じて共通している点の一つは、人称代名詞1人称単数形 *wuz* と、2・3人称複数形および普通名詞の複数形に見られる語尾 *-iš(t)* が、いずれの方言でも主格性を最も強く示し、複数語尾 *-ev* は斜格性を示すことである。表1で示したワハン・ワヒー語の格標示では、1人相単数形 *wuz* と2・3人称複数形の語尾 *-iš(t)/-ev* によって、形態的に主格と2つの斜格(=対格)と

²¹ 格標示以外でも、イシュコマン・ワヒー語が、ゴジャール・ワヒー語よりもワハン・ワヒー語に近い関係にあることを示す文法事象が認められている。例えば不定詞形成語尾は、ゴジャール方言で優勢な *-n* 形でなく、ワハン方言で優勢な *-k* が、イシュコマン側でも多く見られる。

	イシュコマン方言	ワハン方言	ゴジャール方言
to drink	pituk	pitak	pitn
to eat	yituk	yitak	yitn

の境界を示すことができる。ゴジャール・ワヒー語の格標示(表 2)でも同様に、wuz と -iš/-ev によって、主格と 2つの斜格とを大きく二つに分けることが可能である。この形態上の基準をイシュコマン・ワヒー語の格変化パターンに適用してみると、表 3 に示した 3つの格変化パターンは、-iš/-ev の基準では、-iš 系語尾をもつ格 1・2 と、-ev 系語尾をもつ格 3 に分けることができ、機能の面でも、いずれも主語を示す格 1・2 と、対格としての格 3 との間で、同じ境界があることが分かる。この点で考えると、イシュコマン・ワヒー語の格 1・2 は、それが示す機能の通り、主格機能をもつ格が何らかの原因で二つに分離したようにも見える。さらに、イシュコマン・ワヒー語側で認められなかった、斜格 2 (語尾付き形) に相当する格については、(下部) ワハン・ワヒー語では、人称代名詞の斜格語尾の有無は、用法上の区別には事実上関わらなくなっていることなどから、機能上の区別を失った 2つの斜格が合流し、イシュコマン・ワヒー語で格 3 という単一の格へまとまったものと見なすことが妥当のようにも見える。

しかし、イシュコマン・ワヒー語の格 2 は、1 人称単数形に、通時的に見ても明らかに斜格起源の maḏ があり、2 人称と 3 人称単数形では、格 2 と格 3 が同形をとっている。ここで、Payne(1980)が上部ワハン・ワヒー語について、1 人称単数形斜格 maḏ が、過去時制の自動詞文でも用いられるケース(文例 7)参照、本来は主格 wuz を用いるべき)を提示していることに、今一度触れておきたい。その地理的条件から、恐らく下部方言より古形を残していたと思われる上部ワハン方言が、過去時制では格によって能格性と主格・対格性の両面をもつことは 2.1.1.2. で述べた。つまり、ここで示されている、過去時制で自動詞主語の標示に斜格を用いる現象は、二つの構文が併存する状態で格機能にゆらぎが生じた際に、本来は斜格の maḏ が主格(あるいは絶対格?) 的にも捉えられるようになり、本来主格を用いるべき自動詞文に用法が及んだと分析することができる。ちなみにイラン系言語では、詳しい経緯は不明だが、古代期の属格が中期の斜格を経て単一の人称代名詞となる例は複数あり、1 人称(単数形)が形態上は最も保守的に、かつての斜格形の痕跡を示す²²。これらの点を考慮すれば、イシュコマン・ワヒー語でも、上部ワハン語と同様に、能格構文から主格・対格構文への移行と格機能の変化により、現在では格 3 にまとまっているいずれかの斜格が、単に過去の主語標示の専用格として捉えられるようになり、最後に 1 人称単数形 maḏ が本来の斜格の痕跡を残しながら、過去の主格として機能するようになった。つまり、格 2 は、格 1 とは異なり、構文上の変化にともない、本来の斜格が、主語標示機能をもつようになると同時に、そこに時制で分裂という分裂能格における斜格の構文上の側面が融合され、現在の格 2 の形成につながっていったと推測することが可能である。

また、周辺の現象ではあるが、イシュコマン・ワヒー語で顕著に使用頻度が少ないことが分かった、人称接語の用法について。人称接語は、その振る舞いから、ワヒー語をはじめとするパミール諸語を代表する、特徴的な文法現象の一つであり、いずれのパミール系言語でも高頻度に用いられることが指摘されている(Payne1980,1989)。しかし、イシュコマン・ワヒー語では、他のワヒー語下位方言に比べて、人称接語の使用が明らかに少ないように見える。これは、単に独立形を優先的に用いるイシュコマン・ワヒー語の特徴とも言えるが、見方を変えれば、本来は過去時制の能格構文中で斜格の代わりとして用いられていた人称接語が、主格・対格型への移行により斜格が格 3 (対格) へ合流したため、独立形の代用として使いにくくなった可能性も考えられる。

同様の周辺の現象として、上記 3.2. の 8) で指摘した、自動詞・他動詞の過去形に任意的に付加される語尾 -ey/-i について。この任意の語尾はイシュコマン・ワヒー語とワハン・ワヒー語で見られるが、ゴジャール・ワヒー語側では認められないものである。むしろ、ゴジャール・ワヒー語では、この語尾は、自動詞の過去形を形成する際に過去語幹に義務的に付加するもので、省略はできない。また他動詞

²²例えばペルシア語では、人称代名詞 1 人称単数形 man は、中期ペルシア語の斜格形 man を継承し、古代期の属格形 manā に起源をもつ。同様に 1 人称複数形 mā も古代期の属格 a^hmāxam を継承する。

にこの語尾を付加することはない。このことは、分裂能格を保持しており、自動詞と他動詞で構文上の別が明確なゴジャール・ワヒー語では、各々の活用形の構造がしっかりと区別されているが、既に主格・対格型に移行したワハン・ワヒー語やイシュコマン・ワヒー語では、自動詞と他動詞の動詞組織が合流しつつある状況にあるとみることも可能である。この点も、人称接語と共に検証を行っていく必要がある。

さらに、なお仮説の域を出ないものの、近年のイシュコマン・ワヒー語に生じたな変化の外的要因の一つとして、イシュコマン・ワヒー語話者のゴジャール・ワヒー語地域への出稼ぎ労働の増加と、それに伴う言語接触の可能性について触れておく。イシュコマン地域からゴジャール地域へ流入する労働者の現状については、正確な統計は得られていない。しかし、特に1978年のパキスタンと中国を結ぶカラコラム・ハイウェイ開通以降、ゴジャール地域とイシュコマン地域では、人口、経済、教育等の様々な面において、明らかな格差が存在する。教育制度がなお整っていないとは言えないイシュコマン地域では、パキスタンの国語であるウルドゥー語を流暢に話すことができない話者も多い。彼らにとってゴジャール地域は、地理的にも近く経済的に優位であり、同じワヒー語通用域で、しかも同じ宗教マイノリティであるシーア派イスマイリが人口の約100%を占める、格好の出稼ぎ場所である。このような理由で、ゴジャール地域では近年、季節労働を中心に建築工事に携わる、イシュコマンからの短・長期の出稼ぎ労働者の増加が顕著に認められる。

ワヒー語話者の話では、彼らは互いのワヒー語に違いがあることは十分認識しており、特に過去時制の他動詞文における構造上の相違は、もっとも大きな隔たりの一つと自覚しているようである。また、イシュコマンからの労働者が、便宜上、ゴジャール・ワヒー語をまねた、能格構造に類似した過去形を使う例も看取される。そもそもワヒー語は、過去形と完了形では動詞人称語尾を用いないこともあり、互いの方言に似せた表現をとることは比較的容易である。また筆者が行った調査でも、イシュコマン方言インフォーマントが、無意識にゴジャール方言形を使う場面にしばしば遭遇している。これらの現状を考慮すれば、イシュコマン方言話者が、出稼ぎ先で、彼らが優勢方言と見なすゴジャール・ワヒー語形を模して使い、それを故郷へ持ち帰る状況は想像に難くない。ゴジャール・ワヒー語との言語接触が、イシュコマン・ワヒー語特有の格パターンの形成に寄与したとまでは言えないが、このことが、(本来は不要な)時制による分裂という側面を採り入れた主格・対格パターンが定着する遠因となり、今後も何らかの影響を与えていく可能性が十分に予測できることを付言しておく。

4. おわりに

ここまで、イシュコマン・ワヒー語を中心に、ワヒー語下位方言の格標示に見られる構造上の相違とその考察を行ってきた。

一般的に、アラインメント研究では、理論的に可能な格標示パターンとして、1)S=A, P (主格-対格型) 2)S=P, A (能格-絶対格型) 3) S=A=P 型(無語尾形など), 4)3項型(S,A,Pを異なった格で標示), 5)P=A, S型(二重斜格型) それに自動詞の分裂を伴う 6)活格型, のタイプが存在すると言われる。このうち、4)と5)は極めて特異なタイプであり、このように経済的に非効率なパターンは、変化途上にあるなど何らかの理由があると指摘されてきた。これをふまえてワヒー語に関して述べるならば、2.2で示したゴジャール・ワヒー語の格標示は、吉枝(2009)等で指摘してきたように、4)S,A,Pまたは5)に準ずるタイプではあるが、実際の使用では斜格語尾にゆれがみられることが分かっている。さらに、本稿で概観した、ワヒー語の3つの下位方言が示すアラインメント上の相違は、まさに、それぞれの下位方言が、本来の分裂能格構文から主格・対格構文へと移行する段階に置かれている、さまざまなステージを反映するものと言うことができよう。

一方で、アラインメント類型論における位置づけという点では、ワヒー語にみられる格標示変化の分

析に、その普遍規則を適用することが難しい例も認められる。Silverstein (1976)によって提唱された名詞句における階層、いわゆる Silverstein's Hierarchy では、名詞項は、人称代名詞 [1 人称 > 2 人称 > 3 人称] > 固有名詞 > 普通名詞 [人間 > 動物 > 無生物] の階層をなしており、上位 (左) にいくほど動作主、下位 (右) にいくほど動作の対象となりやすい、とされる。つまり構文上は、上位ほど対格型をとりやすく、下位ほど能格型をとりやすい。このことから、上位階層の項が能格標示をもつ場合は、その下の階層にある要素も能格標示をもち、能格性のゆれは対格構文をとりやすい上位側の階層に見られやすくなると解釈できる。一方で、ワヒー語の格標示に立ち戻ってみると、上部ワハン・ワヒー語では1・2 人称単数形が能格性の痕跡を示している。またすでに主格・対格型をとるようになったイシュコマン・ワヒー語でも、格2の形成過程において、おそらくは斜格が過去の主語標示機能をもつようになり、最後に1 人称単数形 *maž* が本来の斜格の痕跡を残しながら、現在のパターンへまとまったと考えることが可能である。このような、階層が低い名詞側から上位の人称代名詞へという能格性崩壊の方向性は、この規則で説明することが難しい興味深い現象である。またこの方向性は、イラン系言語全体の通時的変化にみられる斜格起源の人称代名詞の残存とも共通性をもつことから、ワヒー語、あるいはパミール諸語やイラン語に特有の何らかの別要因が、この名詞句階層に関わる普遍規則に優先して働いていることも想定できる。

イラン語派は、古代期から中期に主格・対格型 > 能格型、また中期から現代期に能格型 > 主格・対格型 (あるいは能格型の保持) という構文上の二大転換を経ており、このメカニズムの解明には多くのイラン語研究者が関心を寄せてきた。現在アラインメント転換の渦中にあるワヒー語についての事例研究は、イラン語派が経験した構文上の変化を、ある意味で再現的に記録し追跡していくことでもあり、この点で、イラン語研究の長年にわたる一大テーマに、新たな分析の糸口を提供することも十分に期待できる。さらに、本稿では、ワヒー語下位方言間にみられるアラインメントパターンの比較対象として、格標示に関わる代名詞の独立形を中心に扱った。しかし実際には、イシュコマン・ワヒー語に見たように、格標示パターンの転換は、その影響が格標示の中心要素にとどまらず、項標示に重要な役割を果たす人称接語や、自動詞・他動詞活用形の形態など、周辺の文法事象にまで余波が及んでいることが分かった。これらについては今後データを蓄積して検証したうえで、ワヒー語全体に認められるアラインメントの転換とその影響について、機会をあらためて包括的に論じていきたいと考えている。

【略号】

ABS	絶対格
DIR	直格
FOC	焦点
IMP	命令
INF	不定詞
NOM	主格
OBL	斜格
PST	過去
PL	複数
PRS	現在
PRF	完了
PROG	継続・進行
PRON.ENCL	人称接語

REC 直格
SG 単数

参考文献

- Backstrom, Peter C. 1992. "Wakhi" and "Appendix D Wakhi Survey Data" in Backstrom, Peter C. & Carla F. Radloff, *Sociolinguistic Survey of Northern Pakistan 2. Languages of Northern Areas*, National Institute of Pakistan Studies, Quaid-e-Azam University/Summer Institute of Linguistics, Islamabad, pp.57-74 and pp.273-92.
- Bashir, Elena 2009 "Wakhi" in G.Windfuhr (ed.) *Iranian Languages*, pp.823-62.
- Comrie, B. 1981,1989. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Blackwell, 『言語普遍性と言語類型論』(松本克己・山本秀樹訳) ひつじ書房 1992 年.
- Coon, J.2013. *Aspects of Split Ergativity*, (Oxford Studies in Comparative Syntax), Oxford University Press.
- Dixon, R.M.W. 1994. *Ergativity*. Cambridge University Press. 柳沢民雄／石田修一(訳)『能格性』研究社,2018 年.
- Grünberg, A. L. & I. M. Steblin-Kamensky. 1988. *La langue Wakhi, Essai grammatical et dictionnaire wakhi-français*, édité et traduit par Dominique Indjoudjian, suivi de *Dictionnaire français-wakhi* établi par Larissa Kydyrbaiéva, Maison des Sciences de l'Homme, Paris [original Russian edition 1976]
- Haig, G.L.J. 2008a. *Alignment Change in Iranian Languages: A Construction Grammar Approach*. Mouton de Gruyter.
- 2008b. "The Emergence of Ergativity in Iranian : Reanalysis or Extension?" in S.Karimi & D.Stilo (eds) *Aspects of Iranian Linguistics*. Cambridge Scholars Publishing. pp.113-26.
- Kaufman, D, 2017 "Double oblique case and agreement across two dialects of Wakhi" (デジタル版)
- Kreutzmann, H. 2015. *Pamirian Crossroads: Kirghiz and Wakhi of High Asia*, Harrassowitz Verlag.
- Lorimer, D.L.R. 1958. *The Wakhi Language*, I. *Introduction, Phonetics, Grammar and Texts*, II. *Vocabulary and Index*, School of Oriental and African Studies, University of London. (私家版; 本書は SOAS の Nicholas Sims-Williams 教授より, 2005 年 6 月に恵与されたものである。同教授のご厚意に記して感謝する)
- Mock, J.H. 1998. *The Discursive Construction of Reality in the Wakhi Community of Northern Pakistan* (Ph.D.Thesis), University of California, Berkeley.
- Morgenstierne, Georg. 1938. "Wakhi" in Morgenstierne, Georg. *Indo-Iranian Frontier Languages*, Second Edition, *Revised and with New Material*, vol. 2 *Iranian Pamir Languages--Yidgha-Munji, Sanglechi-Ishkashmi and Wakhi*, Institute for Sammenlignende Kulturforskning, Universitetsforlaget, Oslo/Bergen/Tromsøe.
- Noda, Keigou 1983. "Ergativity in Middle Persian" *Gengo Kenkyu* 84, pp.105-25.
- Pakhalina, T.N. 1975. *Vakhanskii jazyk*, Moskva, Nauka.
- Payne, J.R. 1980. "The Decay of Ergativity in Pamir Languages" *Lingua* 51.147-86.
- 1989. "Pamir Languages", in Rüdiger Schmitt (ed.) *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden pp.417-44.
- Reinhold, Beate 2006. *Neue Entwicklungen in der Wakhi-Sprache von Gojal (Nordpakistan)*, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
- Schmidt, K.H. 1980. "Reconstructing Active and Ergative Stages of Pre Indo-European" in in F. Plank (ed.), *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*. Academic Press, London, New York. pp.332-45.
- Shaw, I. 1989. *Pakistan Handbook*, Local Colour.
- Silverstein, M. 1976. "Hierarchy of Features and Ergativity." In Dixon, R. M. W. (ed.), *Grammatical Categories in Australian Languages*, Canberra: Australian National University.pp.112-71.
- Takahashi, N. "Sprit Ergativity in Pashto", 『名古屋大学紀要』, 35, pp.129-52.
- Trask, R.L. "On the Origin of Ergativity" in F.Plank (ed.) *Ergativity- Towards A Theory of Grammatical Relations*, 1979, Academic Press. pp.383-404.
- Wendtland, A, 2009 "The Position of the Pamir Languages within East Iranian", *Orientalia Suecana* LVIII, p.172-88.
- Yoshie, Satoko 2005. "The Sound System of Gojal Wakhi", 『東京外国語大学論集』 71, 東京外国語大学, pp.43-82.
- Āmuzgār Zh. & Tafazzoli, A, 1373/1994, *Zabān-e Pahlavi, Adabiyat va dastur-e ān. (Pahlavi Language, Literature, Grammatical Sketch)*, Tehran: Enteshārāt-e Mo'in, 山内和也訳『パフラヴィー語—その文学と文法—』, シルクロード研究所, 1997 年

- 吉枝聡子 2008. 「ゴジャール・ワヒー語の動詞体系」『東京外国語大学論集』 76, pp.35-62.
— 2009. 「ゴジャール・ワヒー語の能格構文」, 『東京外国語大学論集』 79, pp.273-88.
— ワヒー語基礎語彙ウェブサイト : http://www.coelangtufs.ac.jp/multilingual_corpus/wakhi/
吉岡乾 2014 「格配列パターンを決める動詞的要素と名詞的要素—パキスタンの言語を対照して—」『思言
東京外国語大学記述言語学論集』 10, pp.159-202

執筆者連絡先 : yoshie@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2022 年 12 月 10 日